

## ★トランプ大統領の右腕、バノンとはどんな人物か？

雑誌「Time」2017年2月13日号（電子版2月2日）は、トランプ政権の首席戦略官・上級顧問に就任したスティーブ・バノンの人物像をカバーストーリで紹介した。原題は「スティーブ・バノンは世界で2番目の権力者なのか」で、多面的な角度から人物像を紹介している。以下はその抄訳（ボランティア S さんの提供）

現代の大統領は幕開けにあたり馴染みのシンクタンクを使うか自分の長年の信条に則って事を始めるのが常だが、トランプの場合、チーフ・ストラテジストで親友でもあるバノン監督制作の、獐猛サメあり、竜巻あり、キノコ雲ありのドキュメンタリーフィルムでも見ているような気分させる。

トランプ政権の第1幕は、バノンがシナリオを書いてトランプが予告したとおり、政府の内外から抵抗を受けているが、別に驚くにあたらない。トランプは2016年から自分の政権はこれまでとは全く違うと何度も言い続けてきた。「やると言ったらやる」(CAN-DO) 大統領として選挙戦を開始し、自分自身をその運動のリーダーとみなしてきた。運動には「人民委員会」が不可欠である。バノンは教義の純粋性を維持する者であり、真の信者であり、金や立場が目的ではなく、歴史を変えることだけを目指している人物である。バノンはワシントン・ポスト紙への電子メールで「我々は今まさに新しい政治秩序の誕生を目撃しているのだ」と書いている。

この強力なパワーはホワイトハウスの西棟に亀裂を生んでいる。政権発足から1週間もたない1月27日の夕方、閣僚、議会指導者やプレスに何の説明もないまま、トランプは難民プログラムを120日間（シリア難民の場合は無期限）停止し、イスラム圏7か国からの旅行者の入国を禁止した。税関と入国管理官は直ちに入国者に首輪をかけた。中にはちょっと前に入国すれば問題なかった100名以上のグリーンカード保持者や有効なビザ保持者も含まれ、これに抗議して空港に駆けつけた数千人の人たちをテレビカメラが捉えた。

この嵐がホワイトハウスに届いた土曜日、西棟の幹部職員の多くが正装して秘密めいたアルファルファクラブの年次晚餐会に出かけ、政治家が億万長者と酒杯を傾け冗談を交わしている間、バノンはこのような破壊されるべきエリートの集まりを避け、ショックと畏敬の作業を続けるためにホワイトハウスに留まっていた。

陰気で痛烈な就任演説の起草を補佐し、難民禁止令を発すると、バノンは自分を国家安全保障会議の常任メンバーに加えるように交渉することにより、国家安全保障体制に火を放った。トランプが1月30日にツイッターで「全国メディアは敵である」と発したのは、バノ

ンが数日前にニューヨーク・タイムズに寄せたコメントの引き写しだったが、その頃にはあらゆる場所にバノンの指紋がベタベタと付いていた。

(注： バノンはジョージタウン大学院で国家安全保障研究を専攻)

政権の最初の 10 日間でバノンが台頭し、彼の破壊活動の金字塔ともいべき混乱と無秩序のシーンは西棟を揺らし、恐らく大統領自身をも狼狽させたかもしれない。上級職員によれば、トランプは数名のアドバイザーに対して肩の力を抜け（ドレッシング・ダウン）と言ったという。あらゆる事項を主席補佐官のプリーバスを経由すること、全てのスケジュールはその部下のウォルシュを通じるように命じた。ある官僚は「たぶんもっとゆっくり、しっかり協議を重ねるようになるだろう」と **TIMES** に語ってくれた。

それでもバノンはワシントンで最も強力な手立て、即ち執務室に自由に出入りできるという特権を持っている。そしてバノンは勝利のメッセージの焦点をトランプに絞るという成功を収めた人物である。他のアドバイザーがトランプを変えようとしている間、バノンは彼にアクセルを踏ませたのである。

二つのイメージ、即ち秩序ある執務の執行と栄光ある聖戦とは、大統領にとって真に魅力ある課題であり、且つ相反する課題でもある。バノンはトランプの初日を鮮やかに演出し、且つトランプを破壊者として強く印象付けた。その意味で、あるベテランの共和党員が「勝負あった、バノンの勝ち」と語ったとおりである。

トランプの自伝「**The Art of the Deal**」によれば、成功のカギはスタンドプレー（**grandstanding**）、威圧的な語り口（**trash-talking**）、自慢話（**boasting**）、敵対姿勢（**conflict**）にあるとされる。「私の交渉スタイルは極めてシンプル且つ直截だ。高い目標を掲げて、それに向かって押して押して押しまくることだ」。

(注： 1987 年出版、ベストセラーとなった。バブル前の絶頂期)

おそらく、押しまかれることに最も抵抗のある場所はワシントンだろう。だがトランプの選挙戦の勝利の一因は、今は通常の時ではないと理解したことではないか。技術革新は大半のアメリカ人の手のひらに通信革命をもたらした。これが経済のグローバル化によって生じた経済的不満と混じり合った時、新しいポピュリズムが生まれた。人類の歴史の中で、良きにつけ悪しきにつけ組織を作り、真実にせよウソにせよ伝え、権威に疑問を呈し且つ権威の回答を切り崩すことが、今ほど容易だった時代はない。トランプは伝統的な権力のゲートキーパー、即ちメディア、政党、選出非選出を問わずボスとされる人たち、をバイパスする新たなパワーをテコに使ったのである。

(注： ツイッターを武器に使う手法はまさにバノンのお手のモノ)

バノンがブライトバート (Breitbart) での経験から学んだことはこれと同じだった。故ブライトバートが主流メディアへの対抗手段として創設したウェブサイトは、米国政治を直ちに破壊する力を発揮した。Anthony Weiner に聞いてみるが良い。2011年、空前の野望を抱いたニューヨーク選出の下院議員は民主党の草の根運動のアイドルだった。その後ブライトバートは Weiner の Twitter に Screen grab のアドオンを設け、late-night sexting (真夜中のエロ話) の習慣に扉を開いた。その後はソーシャルメディアが引き継いだ。2012年に創設者が突然死去し、友人のバノンが指揮を執った。そのサイトはビデオ、ラジオ、マーチャンダイジングを次々に立ち上げ、海外にもいくつかの局を展開し、ブライトバートは誇大ヘッドラインの技を磨き、いわゆる深夜暴力団の巣窟を提供し、その中から嫌悪すべき白人ナショナリズムを高揚させる者も輩出した。

(注： <http://www.breitbart.com/>)

その場所のエッセンスは、バノンがブライトバートを引き継いだ頃にデビューしたウィルスのビデオに見ることができる。古い自然映像をバックに、巧妙なナレーターがミツアナグマと呼ばれる従順な動物についてコメントするもので、ハチに刺されたり蛇に咬まれたりすると、その動物は殺戮と食餌を止められなくなる。「ミツアナグマはウンコをしない」がナレーターの結語で、バノンはこの結語をモットーにした。

ワシントンの当局者と世界中の関係者は、ミツアナグマが現在どれくらいのショーをやっているのか把握しようと躍起になっている。ミツアナグマは変化を求めてガツガツしているに違いなく、各国の指導者やダボス会議の有識者は言うに及ばず、博識者、聖職者、ロビイスト、献金者等々が寄ってたかって針で刺しても気にしない。いや、むしろそれを望んでいるのだ。

議会は入国禁止令にいら立ち、共和党と民主党の双方から批判が出た。トランプの政策スタッフでバノンの仲間であるスティーブン・ミラーがカメラの前から静かに去った時、彼はトランプのホワイトハウスを辞したという噂が渦巻いた。「正当とされてきたものに挑戦して覆すような大成功をした時は、反対を受けるものですよ」と彼は CBS News に語った。「実際、あなたがやっていることに誰も反対しなければ、何も本質的なことをやっていないということですからね」

あらゆる方向からトランプ目がけて放たれる砲火は、普通なら大統領を引っ込ませる筈だが、彼はアナグマとは違う。大統領が選挙で勝利したアメリカ中部の巨大な赤い海のトランプ王国では、虐められたエリートたちの悲鳴を聞いて大喜びしている。カンザスシティのビジネスマンが喜んだように、「彼は正義ぶっている連中をひっくり返したんだよ」(He's

upsetting all the right people.)

バノンはトランプに対し、ジョージ W ブッシュのように統一者 (uniter) になることにも、オバマのように分断を癒すような役割にもならないように仕向けた。新大統領は自らを「忘れられた人々」の保護者の像に仕立て上げ、それが強力なパワーを放ったことは知っての通りだ。新しい目標が定まれば新たな考えが生まれる。トランプが信頼する支援者はこう言う。「物事は常にしかるべく行われていると言われて来た。我々はそれで良いと言ってきたが、結果はそうはなっていなかった。我々は新しい道を試そうとしているのだ。」

(注： **Forgotten people** は新語ではなく、1942年にオーストラリア首相 **Menzies** が演説で用いた。大衆に直接語り掛ける手法はルーズベルト大統領が執務室から大衆向けに行ったラジオ演説が元祖とされる。)

ここまではトランプとバノンは同意見である。次に何が起きるかは謎だ。トランプは長年のビジネスマンの経験から、混乱の先には最終的にシェイクハンドがあり取引が成立すると見て来た。バノンの場合は、彼のフィルムやラジオ番組を見るかぎり、もっと黙示録的な屈曲 (apocalyptic bent) がある。

2000年代の初め、バノンは世代主義者のウィリアム・シュトラウスとニール・ハウの「**The Fourth Turning**」のとりこになった。この本によれば、アメリカの歴史は4つのフェーズの繰り返しで、成功した世代は危機に陥り、制度を受け入れ、その制度に反抗し、過去の教訓を忘れて次の危機を招いている。およそ80年のサイクルで、独立から南北戦争へ、そして80年前に第二次世界大戦が始まった。次のフェーズで制度は破壊され、再建されることになる。

著者のハウは **TIME** とのインタビューで、10年以上前にバノンがこの本の映画化を持ちかけたと言った。その結果、2010年に **Generation Zero** が制作され、バノンは2008年の金融危機が我々にふりかかる転換点のサインと見ていた。ハウは一部に同意を示した。夫々のサイクルで危機後の世代が、この場合はベビーブーマーだが、過去の危機の記憶を持たずにリーダーとなり、その世代が我々を次の世代に押し出すとハウは言う。

しかし、かつて自らを「庶民の守護聖人」と呼んでいたバノンは、国の政治的なイベントを歴史上の緊急事態で世界の転換点と位置づけ、古い秩序を取り除いてその場所に新しいものを建設する機会として享受したようだ。**Generation Zero** で注目される役を演じた歴史家のデビット カイザーは、バノンとのインタビューが熱く楽しい経験だったと回想している。

だがカイザーが **TIME** に語るには、バノンが今の歴史的フェーズが新たな大戦争を予感させたると主張したのは驚かされた。バノンはこう言った。「独立戦争がありましたね、それより大きな南北がありましたね、そして第二次大戦は南北戦争より大きかったですよね。」  
「彼は私にそれをカメラの前で言わせようとしたが、断わったよ」。

ハウは、バノンが言う「この国が迎えようとする厳しい見通し」にも衝撃を受けた。バノンはラジオ番組で、世界各地の急進的ジハード主義者と「戦争状態にある」と繰り返し指摘した。これは地球規模の生き残り戦争であり、「中東における大規模な戦争」再発の可能性が高い。中国との戦争も視野にあるとも言った。2015年11月には、この確信がブライトバートのミッションの中核にあり、「我々が強く信じ、このサイトの組織理念の1つは、我々は戦争をしているということだ」と語った。

スティーブ・バノンを理解するには、彼の父親に何が起きたのかを理解する必要がある。ブルームバーグ・ビジネスウェークに語ったところによれば、「私はブルーカラー、アイルランド系カトリック、ケネディ尊敬、民主党支持の組合員の家族の出身である」。父のマーチン・バノンは電話会社の配線接続工の助手として就職し、配線工になった。その後管理職に就き、労働者の給料で妻と5人の子供を養って快適な中産階級の生活を送った。友人によれば、スティーブはリッチモンドのギターパーク近くの古い家に単身で住む95歳の父親を頻繁に訪れている。

家族に近い2人によれば、マーティンが一生かけて貯めた貯蓄に金融危機が大打撃を与えたという。バノンはウォールストリート時代の同僚たちが事実上無傷だったのを見て怒り狂った。彼の父親のようなかつてのアメリカの中産階級が損害の大部分を引っ被ったのである。

バージニア州の共和党支部長でバノンと長年家族ぐるみの友人であるパトリック・マクシーニーによれば、「2008年に急激な変化が訪れたと思う。彼の父親のような勤勉な人間が食い物にされ、銀行家たちは救済された。基本的な不公平と言うしかない」

それまでのバノンは、後に自ら語ったように、「これ以上鼻っばしの強い資本家はいない」ような人物だった。1953年に生まれたバノンは、バージニア工科大学の学生会長を務めたが、2015年にブルームバーグのジョシュア・グリーンとのインタビューで語ったように、海軍に入隊するまでは政治に特に関心があったわけではない。「私は軍に入るまで政治的ではなかったが、ジミー・カーターがやったヘボ (f-cked things) を見て、レーガンの大ファンになった。しかし2008年にアジアでの企業経営から帰国し、ブッシュがカーター同様のヘボだったのを見て、あらゆる既成エスタブリッシュメントを否定するようになった。この

国はメチャクチャだったのだ。」

海軍将校として 7 年間勤務した後、バノンはジョージタウン大学で国家安全保障研究の修士、ハーバード大学で MBA を取得し、ゴールドマン・サックスに就職した。そこで彼はリスク回避型パートナーシップの穏やかな文化がカジノの株式上場に変身し、そこではギャンブラーが他人の金でリスクを賭けているのを見た。彼は銀行を辞め、ビバリーヒルズに自営でエンタテインメント専門のブテイク（注： 中小ビジネス相手の金融会社）を開いた。一時はビデオゲームの **World of Warcraft** のプレイヤーのための仮想商品の取引に手をだしたこともある。共同経営者だった **Scot Vorse** は **TIME** のインタビューに答え、自分はガチガチの堅物だったが、バノンは既成概念にとらわれずに創造力を駆使するタイプで、事業の原動力だったと語った。"とにかく前向きで、どんな場合でも **No** はない。スポンジみたいな男ですよ。頭が良くて人の言うことを聴く。戦略的思考家で、いつも人の 3, 4 歩先を行っている」。

この小さな会社は、三星、MGM、イタリアのランプで億万長者であり将来の首相シルヴィオ・ベルルスコーニなどの客を獲得した。だがバノンの大得点はまだ先だった。1993 年、ケーブルテレビの大物テッド・ターナーがキャノン・ロック・エンターテインメントを買収した際にバノンが手伝い、バノンが後日語ったところでは、その折にターナーは、銀行家も一口乗らなければ、と言い張った。バノンの会社は現金を出しただけでなく、**Senfeld** という不人気なコメディ番組を含むキャスルロックテレビ番組 5 コマの権利の一部を入手した。

その間、バノンは取引商売から映画産業へジワジワと轉身し、アリゾナ砂漠の **Biosphere 2** と呼ばれる厄介な案件を扱うような回り道もした。1999 年にはシェイクスピア劇の焼き直し番組の **Titus** の共同制作者を務めたが、それは失敗に終わった。彼が脚本を書いて制作したドキュメンタリーに目を向けると、ロナルド・レーガン、サラ・パリン、ミッシェル・バックマンを称える作品を制作し、右のマイケル ムーアのような存在になった。

ミネソタ選出の元下院議員のバックマンは、バノンは主流メディアがやれないこと、やりたくないことが分かっていたと述べている。アメリカには「ランプが忘れられた男と呼んだグロテスクな漫画」によって海岸地帯のエリート連中が追い払われるという、ある種のいやな潮流が生まれている。「彼は代弁してやりたかっただけではないか。そして忘れ去られただけでなく主流メディアから欺かれ続けてきた人達に舞台を与えてやろう、ということだったのではないか。」

バノンの人生は、政治、経済、文化のあらゆる種類のエリートと闘う十字軍と化した。バノンの考え方の変化は彼の服装にも表れている。彼のお好みの T シャツ、カーゴ短パン、無

精ひげを見て、ゴールドマン・サックスを連想できる人はいない。

ブライトバートでバノンの下で働いていた人たちによれば、バノンは火山のような男だった。バノンの友人でブライトバートのスポーツ部門の編集者として短期間働いたことのある共和党コンサルタントのジョン・パドナーは、バノンに「こっぴどく叱られ」、その数時間後に引き返して来てわりの良い仕事につけてくれた時のことを思い出した。「彼はグサッとくるようなことを言うが、同時に褒めまくることも出来る人だ」と語った。

世の中は情け深い人ばかりではない。元ブライトバートの編集者のベン・シャピロが昨年 **TIMES** に語ったところでは、「付き合った人間の中で間違いなく最悪の人間だった。彼は常に人を虐待する。彼はあらゆるものを戦争と見る。困った場面になると、相手をつぶしにかかる。」

この感情は元ブライトバートの職員で控えめなコメンテーターだったダナ・ローシュにも共通する。「神様が作った緑の地球上で最悪の人の一人でした」と今年のラジオ番組でこう言った。バノンは 1996 年に夫婦から家庭内暴力で告発されたが、妻が証人尋問を断ったのでその事件は棄却された。彼女はその後訴状の中でバノンは自分の娘を私立学校に入れるのを反対したが、その理由はその学校にユダヤ人の学生が多くユダヤ流に教育されるのを嫌ったためだったと主張した。バノンはこれらの主張を否定し、**TIMES** がホワイトハウスのスポークスパーソンを通じて本件についてコメントを求めたが回答が無かった。

(注： バノンに 3 度の離婚歴あり。

トランプの両親はユダヤ病院で死去、反ユダヤのバノンと衝突するのでは?)

バノンはトランプの中に究極のアウトサイダーを見た。彼は自分のラジオ番組に候補者を頻繁に出演させたが、職員にはトランプ最良のストーリーで一貫するように命じていた。バノンの刷り込みの結果、大統領にホワイトハウスの要職に元ブライトバート職員を雇用させたり、大統領の執務デスクの近くに自分のアイドルであるアンドリュー・ジャクソンの肖像を飾らせたりするに及んでいる。

(注： **A. Jackson** 第 7 代、初の中部出身、初の民主党大統領、強権で歴代唯一の不信任決議を受けた。民衆の見方を標榜しつつ人種差別主義者)

「バノンが本当に天性を発揮するのは政策面だろう」とトランプの長年の同志は語る。どんな政策で？「全てだ。彼はトランプの指南役（ファシリテーター）だよ」。だが、と顧問は続ける。「トランプのホワイトハウスでは、大統領が与えたパワーの範囲内でしかパワーを獲得し維持できない。トランプとバートンは選挙前に就任直後にやりたいことのリストを作った。どれをやるか決めるのはトランプだ。バノンは賢くも大統領にリストを出すだけに

留めた。」

支配階級エリートを侮辱することで生ずる混乱をトランプが歓迎しているにしても、野火を燃やすようなやり方はホワイトハウス内部に緊張を生んでいる。上級職員によれば、トランプは主任補佐官のプリーバスに対し、今後は権限行使とコミュニケーションを更に統制するように命じた。ホワイトハウスの情報発信で政策部門、法務部門との連携を進める役割を大統領顧問のコンウェイが担うことになった。

これまで数週間の内部的な苦闘は十分に心配するに足る。難民入国禁止の命令を急いだのは。国家安全保障理事会 (NSC) の専門スタッフ内で回覧されていた文書がプレスにリークされたことがバノンとミラーに報告されたためと行政府筋の情報で分かった。バノンとミラーは今後メモや草案へのアクセスを制限する方向に動いている。議員や一部の閣僚でさえ除外されたり大幅にアクセスを制限されたりすることになった。

その結果、関係者によれば、論議を呼ぶような命令が署名された後の混乱は治まるようになったという。人数は分からないが、グリーンカードや有効なビザの所有者が米国への旅行の途上にあつた。最初のホワイトハウスの指針は、全員を送還すべきということだった。だが移民や市民権を扱う弁護士が連邦裁判所に駆けつけて命令の変更を要求し、ホワイトハウスは決定を覆してグリーンカード保有者を決定の例外とした。記者は、例えば旅行が禁止された国名など、基本的な事実さえ知ることさえ難しかった。数日後、大統領はバノンを国家安全保障理事会の通常メンバーにする決定の変更にも介入した。CIA 長官のマイク・ポンペオも加えたかったのだ。

命令が出されてから 4 日後の火曜日の夜までに、ホワイトハウスは通常の状態にしようと試みていた。トランプは、彼が任命する最初の最高裁判事となるコロラド州の保守派判事のニール・ゴルシャフの任命をプライムタイムで発表するように計らった。だが政権が最終的に安定感を獲得したとしても、バノンが姿を消していたわけではない。

大統領はここでも軌道修正をした。だが彼がバノンとの会話によって生命を得たポピュリストとしてのメッセージと手法は残る。忘れられた人達の為の戦いに於いて、混乱は悪いことではない。必要なことはもっと前もって考え抜き、しっかりフォローすることが必要なのだ。

エスタブリッシュメントを解体した者とそれをリードし続けようとする者との綱引きは、トランプの任期中続くことになるだろう。それは内部を目覚めさせたアウトサイダー全てが抱える矛盾なのだ。大統領選挙はトランプによって語られたダビデとゴリアテの戦いの



物語だったと某高官が述べている。しかしダビデが王になった。「ダビデは一発でゴリアテを倒したが、記者会見をせず、大統領令も出さなかった。我々は全てを迅速に変える必要はないし、それを華々しく発表する必要もない。」

(了)